行ふが、最も迅速で且つ奏効が的確であると信じてゐる。

(1)第一活法は患者を座せしめて、(通常は所謂アグラを組ませる)、己は後方に廻り中指端を脊椎第一骨にあて、脊椎に添へて掌をふする時は、腕關節は丁度乳の裏通り、通常ケンビキモトと稱する所にあるのである。此の時術者の氣合と共に左に患者を抱へながら腕關節を以つて強く壓するのである。之を術者の呼吸に合せて數回行ふのである。

(2)第二活法としては、前記の如く患者を支へ、徐かに患者の背部に廻り、片膝を立てゝ、膝蓋骨を患者の胃部の裏通りに當て、兩手に患者を前から支へて胸をなで下けながら、氣合の籠りたる時グッと抱へ寄せる樣にして、膝蓋骨を以つて胃部の背面を強く壓するのである。之を術者の呼吸に合せて行ふこと數回である。

(3)第三活法。前法の如く座せしめたる患者を、後より抱へ肋骨のはづれより徐かに兩手の指端を押込む樣にして、差し入れ、氣合と共にグッと胃部をカキ上げる樣

にし、矢張り呼吸に合せて數回行ふのである。

(4)第四活法。患者を左手に抱へ、右手を以つて患者の左の脾腹より引き廻はす樣にして、肋骨のはづれを押し廻はし、腕關節を以つて胃部を押し上げる、呼吸に合せて數回之を試みることは前同樣である。

(5)第五活法。患者を仰臥せしめ、兩腹側を撫で下ろし來つて、臍下にて兩手を揃へ、掌心を以つて下腹を押し上げる樣にして、自己の氣合を移すのである。之を呼吸と共に數回行ふは前同樣である。

(6)第六活法。打臥して患者を寢かせ、兩背側より撫で下げ來つて肋骨端に至り、身體を挾む樣にして斜上方に體を壓し、氣合を移し、更に呼吸と共に繰り返すのである。

(7)第七活法。前出腦活法即ち神傳の活法。(第二篇十二頁)

(8)第八活法。前出足心活法。(第二篇二十頁)

第三款　縊死又は絞殺窒息

縊者を助ける場合には、必ず假死者の足に達する丈けの臺を持ち來り、假死者を充分に抱き支へて、然かる後紐を切り放つべきである。決してイキナリ紐を切り放つ可きではない。若しかくする時は假死者の重量のため多くは之を取り落し、爲めに臀部を打ち生き返るべかりし者を、遂に死に至らしめることが多いからである。

縊死者を下ろし、(絞殺されたる者は紐をとり除き)たる場合には第一活法より第六活法まで隨意に行ふ可きである。

古來傳へたる所に依れば、活法の合性なるものがあつて、年月日時の四柱の五行の相生相尅關係から、活法の奏効に差異を生ずるから、一活を數回試みて効なかりしとて落膽することなく、更に他の方法を試みよと云ふのである。其の理論の當否は別として、種々なる活法を試みることは慥かに必要なことである。

特に術者の要領に得意不得意があるに至つては尚更である。

第四款　水死

之は水泳の方で注意すべきことであるが、水死人が未だ死に切らず、苦悶狀態にある場合、救ひの爲めイキナリ之に泳ぎつきて、とりつくのは甚だ危險なことである。其前後より廻り、次第に岸の方へ押しやりながら、泳ぎ來るか、乃至場合によりては水中にて殺活を施し、全く假死の狀態にして引抱へて岸に來るべきである。

溺死人に對してなすべき第一のことは、鼻孔口中の掃除である。其の中にある泥の如きものを充分に掃除し、舌を充分に引き出し、然かる後水を吐かすべきであつて、其の吐方は普通次の樣である。

(1)　假死人を倒に抱へて、腹と我が腹とを合せ、下腹に充分に力を入れて彼を抱きしめるのである。

(2) 子供ならば、足を捉へて倒にして徐かにふるのである。

(3) 枕又は我が膝に假死人の腹を當て、靜かに背を撫でながら背部より壓する。

右のうち何れかに依りて充分に水を吐かせたる後は身體を乾きたる手拭にてよく拭ひ、秋冬の天寒き時の如きは、遠火にて體を温め然かる後に前記の第一より第六に至る活法を施すべきである。

第五款　墜落顚倒

高き所より落ち、又は顚倒したる爲めに人事不省に陷りたる場合は、特に甚しく外形的怪我のありや無やを檢した後るに前記の活法を施すべきである。

なほ此の場合に於いては、必ず奥の活、即ち神傳の活を施さねばならぬ。

是れについて誠に面白い話がある、夫れは現時市内に於いて氣合術の講授をされつゝある某大先生が、嘗つて日比谷の松本樓に於いて酒宴の際、友人が泥醉して二

階階段より轉り落ち、爲めに人事不省に陷つたことがある。所が平素術自慢先生默してもゐられず、駈けつけて寢かせたまゝ盛んに氣合を掛けたが、二時間餘も辛抱して遂に何等の効果なく、可惜大先生の名に掛る所であつたが、先生どう考へたものか、假死者を起して兩手に之を支へ、腦天から猛烈に氣合をかけると、二時間餘に及ぶも無効でもう全く死んだものとさへ思つてゐたものが、ウーンとヴナリ初め目を見開くに至り、衆人皆眉を開いたと云ふ話がある。

之は氣合の効果も然ることながら、期せずして此の起して氣合をかけ、兩手が患者の兩肩にかゝつてゐたことは、第二活法と第五活法とを混用した樣な工合になつたのである。

心靈界の研究に沒頭するものは、とかく物理的方面をうとんじ勝ちだが、此の話をよく玩味して、更に活法の眞精神を體得し、時に臨んで之を用ふ可きである。

第六欵　睪丸活法

睪丸に強烈なる打擊を受ける時は、睪丸は上方に舞上り、人事不省になるを普通とする。此の場合に施すべき活法は、通例睪丸活なる名を以つて呼び、柔道家の間には奥傳を以つて許されることになつてゐるのである。

吾人が田舍にて道場を持ちたりし時、吾人の不在に稽古中、亂取寢業にて咽喉の締合をせし時、上方より下方の者を締め居りし者が、突然人事不省になりたる爲め當時居合せたりし初心の代稽古の者かけ寄りて、活法を施したるに、寸時人心つきて直に復人事を辨せざるに至るより、是れ吾人が豫ねて話し置きたる活の相性によるものなりと早合點し、種々の活法を試みたるも遂に効なく、萬止むなくして、吾人の出先に來り事の由を告げたるより、事情を聽取した後そは定めし睪丸の上れるなるべし。睪丸活法を施せしやと云ふに、心附かずして未だなりと云ふ。然らば

と立ち歸りて試みしめたるに、果して吾人の言の如くにて其の後は異常なかりしとて今も一つ話にして互に誡め合へり、眞に睪丸活法は大切なものである。

而して其の法は、患者を抱き上げて臀を浮かせ、薦骨の部を足の拇趾裏にてトン〳〵と蹴るか。拳を以つて何人かに打たしむる時は、大抵睪丸は下るものである、若しなほ下らざる時は、耻骨接合の上端と、會陰部より指端を以つてもみ出す心持ちにて押す時は必ず飛出すものである。

即ち睪丸が下りたる後は、第一より第六に至る活法は、何れを施すもよいのである。唯最後に神傳活を行ふを要するのである。

第六章　惡癖矯正法

惡癖矯正なる別題を掲げても、要は圓融法を施すにあるのである。併しながら更に之と共に、第一型式より第五型式に至る迄を、隨時用ゐることを要するのである

治療に用ゐる圓融法に於いては、術者に何等の思念をも要さなかつたのであるが、此の矯正法に於いては何々の癡を矯正するとの强烈なる思念を必要とし、更に被術者と術者との間に、術者は被術者甲の爲めに其の惡癖を矯正すとの自覺と、强烈なる思念を要し、甲は術者は我爲めに今何々の惡癖を矯正せんが爲めに施術せりとの自覺を必要とする、否之ある場合に於いて、奏効の顯著なるを見るのである。

第一節　吃音

吃音は諸種の惡癖中でも、其の數に於いて最も多きものであつて、其の先天的なると、後天的なるとに論なし、之を矯正することは、頗る困難なことであるが、我が氣合術法に依れば、比較的容易に治療の目的を達し得る。

矯正法。後天的吃音は多くは他の吃音者の眞似を爲すに由つて此の癖をなすのである、又或一部は一種の神經衰弱症から非常にセツカチになり、發音をアセル爲めに、遂に吃音の習慣を得るに至るのであるが、既に吃音者となれば、其の後天的なると、先天的なるとに論なく、一樣に下腹部の力の充實を缺いてゐるものである施術者は此の點に注意して、先づ患者の姿勢を正し、下腹部に力を充實せしめ、眼と口とを充分に塞がしめたる後、眉間に第五型式を行ひ、然かる後咽喉部、頸部、胃部、腸部と、順次に第一乃至第三型式を行ひ、更らに頭部、特に後腦部に、第二型式を行ひ、然かる後圓融法を行ひて施術を了るのである。

注意　補助法として靈動の勵行と、靜座、深呼吸法を行はしめることを要する。

施術の結果はよく一回にして奏効する場合と、數回乃至數十回を要する場合とがあつて、經過は必ずしも一樣ではない。而かも之は決して術者の技倆、如何に依るものではないのであるから、術者は經過に囚れることなく、殆んど放念、放任的に施術する事を要する。

由來吃音矯正をなす場合に當つて、施術者よりも更に被術者、及び之が周圍の者

が非常の興味と期待とを以てする丈け、それ丈け其の効果に對する監視が嚴重苛酷であつて之が爲めに兎もすれば其の効果を殺滅せられることが多いのであるから、特に術者に於いて強い自信と覺悟とを持つて立つことを切要とするのである。

此の意味に於いて、患者を他と隔離することが出來るならば更に好都合である。

第二節　書痙攣

書痙攣と言ふのは、文字を書寫せんと欲して執筆したる際、痙攣の發作するを言ふのであつて、惡癖と言ふよりは寧ろ一種の疾患と言つた方が本當であるが、其の痙攣發作が、毛筆の時よりもペン鉛筆等の如きものゝ場合が、左迄に甚しくない點に考へて、茲には矯正し得る方法を述べることにする。

書痙攣の原因は、主として文字等の書寫の過度なる爲め、筋肉過勞を發し、爲めに起るものであつて、タイピスト、又はピアニスト等の音樂家を初め、裁縫師、彫

刻師其の他卷莨捲を業とする者等凡そ主として指を過度に使用するものにも發するものである。

矯正法　補助法として靈動を盛んに勵行せしめることを要する。

頭部其の他に腦病の場合と同一型式による施術を爲し、次いで兩腕に第二型式を行ひ、更に術者と被術者との指を交互に粗み合せ、第五型式の心持にて氣合の移轉をやりたる後、圓融法を施すのである。

注意　出來得ることならば、施術期間は書痙攣の原因を與へたりと認めらるべきことを禁ずるを可とするのである。

第三節　飲酒癖

飲酒癖の矯正の如きに至つては、患者と術者との間に精神的連絡のある外に、更に患者が自己の欲望に打ち克たんとする努力、若しくは尠くも之を節せんとする意

思の作用を要する、矯正を依頼したる一面、放縱自儘に飲酒をするならば、容易に目的を達成せられるものでないのは自然の理である。

斯く言へばとて決して兩者の間に催眠術的連繫を要するとの意ではない。術者の努力を患者の放恣に依つて打ち破らざらんことを希ふ意なのである。

勿論患者の少しも之を知ざる間に、施術して矯癖の目的が達し得られぬと言ふのではなく、斯樣の場合患者が先の如く破壞的反對的態度に出るよりも、一層容易に目的を達し得るのであるが、夫は普通の術者が通常の努力を以てしては望み得ないことである。

矯正法　姿勢を正し、眼を閉じ口を塞いで、深長なる呼吸をなさしめ、先づ眉間に對して第五型式を行ひ、次いで頭部、前額部、後腦部に第二型式を施し更に頸部及び特に咽喉部に第一又は第三型式を施し、然る後胃部及び腸部に對して第三型式の施術を爲し、更に心臟部に強き思念を加へながら第一型式を施すのである。

次いで圓融法の施術をなすべきである。

第四節　喫煙癖

前節の説明に依つて大樣は推測がつくこと、思ふが、喫煙癖は其の性質に於いて飲酒癖よりも矯正し易きが如きも、却つて誘惑に陷り易く、爲めに施術の効果が破られ易く、結局矯正の目的を遂げ難いものであるから、患者も術者も、最初から其の覺悟を以つてかゝるべきである。

矯正法　施術の法は前款に法とればよい。

注意　前説明の通り、予の施術の經驗に依ると、本癖の者は一寸やめて、また容易に初めるものが多いのであるが、既に一寸でもやめれば、夫れ丈け効果があつた譯で、短氣を起さずに施術をしてゐれば、次第に喫煙を廢する期間が長くなり、遂に完全に目的を達するものであるから、其の心積りで施術すべきである。

第五節　内辨慶癖

内辨慶癖とは、所謂内辨慶の外すぼりで、陰に強く陽に弱きの謂であつて、家内知友の前に於いては大言壯語なか〳〵豪勢なるも、一度家を出でんか恰も喪家の犬の如く、更に公衆の席上、或は上長官の前に出でんか、内心非常の苦悶を感じ、顔面に紅潮し、全身顫動を生じ、事物を正視し難し、舌は硬化して言語自由ならず、其の甚しきに至つては、遂に卒倒するが如きものを言ふのである。

矯正法　本癖は特殊の神經衰弱であつて、之が矯正と云ふよりも、療法は同病の治療法に依るべきであるが、更に大要を述べんか。

(1)　常に正姿勢を維持して、雄々しき態度を常に持する樣心掛けしむること。

(2)　靜座腹式の正呼吸を勵行せしむること。

(3)　靈動を勵行せしむること。

(4)　眞英雄偉人の傳記等を讀ましむること。

(5)　平素の大言壯語を戒め、出來る丈け口を開かざる樣心掛けしめ、氣を内に藏することになれしむること。

以上の五ケ條を補充法として充分に練習勵行せしむる外、施術としては下腹部に強き第三型式を施し、胸部、胃部、腸部に第二型式を施し、心臟部に對し第三又は第四型式の施術をなし、次いで頭部、顔面部に第一型式を施すべきである。而して後猛烈なる思念の下に圓融法を施すべきである。

施術準備として患者を正座せしめ、深長なる呼吸を命じ、患者の前額に第五型式を施すべきは言ふ迄もない。

第六節　手淫癖

手淫の多くの場合淫蕩なる周圍に刺戟せられ、内的には淫欲の滿足と云ふよりも

一種の好奇心から之を行ひ、遂に次第に度を重ねて癖をなすに至るもので、既に癖をなすに至つては如何なる癖も同じことながら、特に本癖は自家抑制なる力を缺くものにて、誠に矯正の目的の達し難いものである。

矯正法　神經衰弱症を既に誘起せる場合多きが故に之が爲めに療法を施す必要あるべきも、未だ誘起せざる時も、神經衰弱症同樣の療法を行ふべきである。

(1) 正座腹式呼吸を勵行せしむること。
(2) 靈動を勵行せしむること。
(3) 水浴又は摩擦を勵行せしむること。
(4) 可及的獨居せしめざること。
(5) 戸外に運動せしむること。
(6) 寢前必ず靈動法を修し、腹式呼吸をなすこと。
(7) 淫欲の起りたる時は、別に講義錄に示す雄健雄詰をなすべきこと。

但し本項は本人自から施術を申立でたる時の外、命じ難きことなるも、他の施術に託して種々の雜談をなす際、暗示を與ふる等のことに依つて敎へ命ずるを得べし。

以上の補助法を執りつつ、頭部に、胸部に、胃腸部に第一第二型式を行ひ、更に臍下丹田に第三型式を行ひ、陰部に對し第五型式を施すべきである。然かる後圓融法を施術するのである。

注意　患者に瞑目深呼吸を命じ、眉間に對し第五型式を行ふべきは云ふをまたぬことである。

第七節　色情癖

色情癖とは色情性の異常に昂進したものを指すのであつて、其の度が更に甚しくなれば、遂に色情狂となるのであるが、此所に言ふものは、尙ほ未だ常識を失は

ず、唯だ其の性慾の昂進し來つた場合に、自己意思を以つて抑制し難きもの、及び異性を甲より乙、乙より丙と轉々する性癖を有するものを指稱するのである。

矯正法　本療法を自身に依賴する者は、奏効も顯著で迅速であるが、男女とも自から依賴する場合は尠い。多くは他人より依賴され却つて本人には何等の承知承諾をも得ずに施術することが多いのであるが、直接治療の場合は、可及的何等かの方法に依り（例之他の病氣の治療に託するが如き）、本癖矯正の目的に適する樣なる施術をなし、補助法を勵行せしむ可きである。

併し其の矯正法の要領に至つては、前節手淫の條下に述べた所を斟酌すればよい。

注意　飲食物としては刺戟性のもの、及び肉食を禁じ、野菜食を勵行し、所謂暖衣飽食をなすことを避けるがよい。彼の夜具の如きは、特に此の注意を要するのである。

出來るなれば、ある期間特に交接を禁ずる樣にすれば奏効は更に確實である。

第八節　盜癖、賭博癖及殘虐性

本節に三種の癖を同時に掲げたるも、其の癖の原因は決して同一であると云ふのではない。所謂精神低格者の仲間であつて、心身に何等かの特殊缺陷を包藏し、之が爲めに諸の惡癖となつて顯はれる點は同一である。

併し身體的方面の缺陷としては、胃腸病乃至心臟疾患が其の最も多きを占め、更に女子に在つては子宮疾患が因をなすことが多いのである。

本癖治療矯正に當つて、術者の深く特に注意すべきことは、彼等は悉く精神作用に特殊の偏畸を有し、普通の人情を以つて解し難き點を有することである。

此の點に深く注意し、出來るだけ本人の今日あるに至つた經路を探査して、患者に對する血の迸る樣な同情、人間性を有する生々とした同情の下に、矯正にとりかゝらねば、却つて意外の結果を招くに至るのである。

聊か事例が外れる樣な感もあるが、魔窟に住む女の群を救はんとする、或る聖い人達が、或は社會廓清とか、風敎維持の爲めとか云つた樣な、自分達本位の御都合主義や、神樣に對する努めであると云つた樣な冷い義務觀念や、乃至彼等は哀しなるものなり、我より弱きものなり、救はずんばあるべからずてな理性や、道念から割出された場合や、更に彼を救濟することに依つて己の名を爲さんとするが如きさもしい心情からなされた場合には、反つて彼等の反感を買ひ、嘲笑を受けるのである。眞に彼等を救はんとするには、彼等自身の人性に觸れた眞同情から起る場合でなければ駄目である。淪落の底に沈めるものゝ胸奥にも、本統の人間の心の閃きはある。先づ之に到達する迄に、同情（夫れは通り一遍の人間のする同情でなし、眞に彼等を解したるものゝする同情）に依つて、彼等と精神的に合體することを要する樣に、本癖の矯正をなさんとする場合には、必ずこの理解し、合體せる點より起れる同情を要するのである。

矯正法　型式としては、經過によりて夫々工夫すべきではあるが、先づ前記の癖の原因とも見るべき神經衰弱症、及び心臟虛弱症、子宮疾患等に對する治療型式を施し、更に圓融法を施すべきである。

注意　補助法としては、前掲を參照參酌すべきである。なほ小說、活動寫眞、芝居其の他好奇心、及び性慾を誘發するが如きものを避けしむべきである。

第九節　美食癖

世俗傳へて言ふ、此の世は食ふ界（空海）、先きの世は滅法界と、其の本義は別として、人間は其の生活の第一要件として食ふことをあげる。即ち花の下より、鼻の下で、彼岸佛でないけれど、花より團子の世の中である。

既に飲食は其の心身を保持せんが爲めの藥餌であるとすれば、必ずしも美食するを要さないのであるが、唯口腹の慾に馳られて、美食の癖をなすに至るのである。

口腹の慾は身體の生理的要求と一致しないのであるから、本矯正法によつて食慾を正しき生理的要求に止める樣にすべきである。

矯正法　及び其補助法には、前掲を參照考察すれば自得すべきであるが、本癖は特に身體の閑散なる者に於いて甚しいのであるから、特に此の點に注意を拂ふことを要する。

注意　美食するを以つて、優等なる生活なりと考ふが如き觀念に反する、正道德的觀念を修養することは、切要なることである。尙消極的注意としては、粗食慾を誹るが如き書物及び事物の見聞を禁ずるがよい。

第十節　美飾癖、虛言癖

本癖は特に婦人に多い。而かも都會地に住む婦人に更に多い、物質文明の進步、黃金萬能主義の世に於いてヨリ更に甚しい。

本癖及び虛言癖等は、下腹の力の充實不充分で、臆病な者に最も多きを見るのである。實に斯かる惡癖に惱める者は、既に自己の存在尊き自己の存在を自覺することなく、唯醜き肉の自己を知るのみのものに多いのであるから、治療矯正の補助法としては、最も自己內心の修養に重きを置かしむべきである。

矯正法　患者をして正座瞑目せしめ、深長なる呼吸を命じ、其の眉間に第五型式を施し、下腹部丹田に第三型式を施し、頭部に神經衰弱と同樣なる施術をなし、更に胸部、胃部、腹部に第二型式を施し、次いで患者を仰臥せしめ、下肢に第二型式を施したる後、足心活を行ひ、次いで更に正座せしめて、强烈なる思念の下に圓融法を施すのである。

補助的方法としては、第六節に述べたる所を參照すべきである。

第十一節　潔癖

由來我が邦人は清淨性を有する。特に立國の本義たる祭祀の時の如き、修祓を以つて第一義とし、國民修養の唯一唯神の方法として禊祓が傳へられてゐる。此の清淨を愛し、心身の常に清淨高潔ならんことを欲するは、實に我が邦人が世界にまたなき高等なる民族なる事を表徵するものであるが、若し之が度に過ぎて、所謂潔癖とならんか、實に其の癖より生ずる苦痛に堪へざるのみならず、時には汚穢せりとの感が一種の强迫觀念となつて、當人を苦しめ、更に甚しきに至つては、精神病者に等しきものとなるのである。

本癖を心理的立場より、專門に研究した者の言ふ所に依れば、本患者は實に精神低格者の一種にして、必ず生理的、特殊缺陷を有するものであると。

既に生理的缺陷を有するもの、又は父祖の反對性遺傳よりして本癖を發し、次第

に癖の昂進するものなるが故に、其の未だ甚しからざる內に之を治すべきである。

矯正法　本癖患者に對しても補助的に

(1)　正座、深呼吸、震動三者の勵行をなさしめ。

(2)　常に思ひ出したる毎に、常住不斷に腹力の充實を圖る樣命ずべきである。

直接の施術としては、瞑目正座せる患者の眉宇に、强烈なる氣合をかけ、第五型式を施し、更に圓融法を施すのである。

本章に述べたる所に依つて、矯正法は盡きたと云ふのではない。併しながら之を類推し、參酌するならば、如何なる惡癖に對しても、矯正法を施すべき方法を自得し得るものと信ずるが故に、一先づ筆を擱くことゝする。

本章に述べたる矯正法も、亦遠隔法に依ることが出來るのである。併しながら、本章中にも述べたる通り、普通の療法の場合よりも、特に術者と患者とが密接に

關係を保持することを要すべき場合があるからして、自然其の奏効の點に於いて、普通の遠隔治療よりも、鈍い點があることは始めから承知の上で行ふ可きである。

起死回生霊動氣合療法秘授錄（第三公衆治療及惡癖矯正篇）終

昭和三年五月十五日　印刷
昭和三年五月廿日　發行
昭和三年十月廿日　二版

非賣品

編輯兼發行人　桂六十郎　東京府下北豐島郡高田町雜司ヶ谷九五一番地
印刷人　鎌田智　東京府下西巣鴨向原二九七二番地
印刷所　二進社印刷所　東京府下西巣鴨向原二九七二番地

不許復製

發行所　東京市外高田町雜司ヶ谷九五一番地
大日本霊學通信學校
振替東京五八四七九番

318
775

爾に還れ

爾は陛下の赤子なり
爾は自然の愛兒なり
日と氣と土とに親みて
爾の自然に還れかし

終